

自己形成 (Self-development) への道

M. J. ランゲフェルド

本日は自己形成についてお話するのですが、この自己形成という言葉がすでに二つの問題を提起しています。それは「自己」と「形成」という問題です。

先ず「形成」ということを簡単に考えてみましょう。この言葉は非常に広く使用されているため、意味がかなり不明瞭になっています。例えば、私達は生物学的形成、歴史的形成、あるいは病気の形成、または子供の形成を考えることができます。そしてこの言葉で常にある過程のことをさしていますが、こうした広い使い方があるために、私が今、自己形成ということをお話する時に、ここで私が使う「形成」という言葉の意味の説明が必要になります。

そこで人間形成の過程の中で、人間がどのように自分の身体のもつ限界から抜け出して行くか、ということから説明致しましょう。小さな子供達と遊んでみた簡単な実験を例にして説明をしてみます。

私は3、4歳の子供に積木で図1のような橋を作ってみせました。出来上がったらすぐこわし、子供にも作ってみたらと誘いました。するとその子は図2のように作りました。それでは上に乗せる積木が落ちるからだめじゃないか、といいますと、子供は平気な顔で※印のところに人差指を当てて積木を支え、これでいいんだと言いました。なるほど、子供にとって、この時点では問題はないわけです。

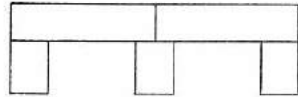


図1

ここで起こったことを考えてみますと、この子供の一本の指が彼と外の世界を繋ぐつなぎになっており、彼の身体の一部が依然として外界と同一視されています。

同様の実験をもう一つお話ししましょう。

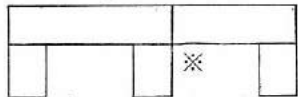


図2

部屋の片隅に机がおいてあり、その周囲を長方形になるように鉄棒の柵が立っています。机の足に紐が結びつけてあり、その端が鉄の棒にとどいています。そしてこの紐の途中にお菓子がかけられています(図3参照)。

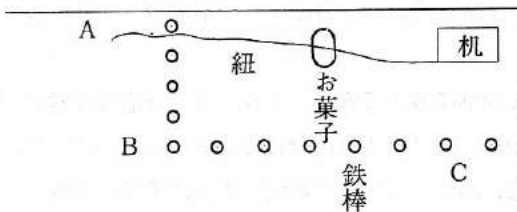


図3

さてこのお菓子をどのようにして取るかということです。大人であれば自分の身体の限界も物的な外界の状況も分かっていますから、紐の端を棒のところでたぐりながら、次々とA地点からB

地点を経てC地点へ近づければお菓子が取れるとすぐ分かります。大人であれば頭の中でA地点からC地点に飛び、こうした操作を考え出すことができます。が子供の場合はそうはいきません。

子供はどうするでしょう。子供は柵ごしに手を伸ばして何とかしようとし

ますが、柵が高すぎます。大人は例えば物理的条件を毀して目的を達することも出来ますが、子供の力ではそれもできません。お菓子に一番近い柵の間から一生懸命手を伸ばしますが柵はびくともせず、お菓子にはとどきません。そうすると子供はどうするでしょう。教育されている子供であれば大人を信頼して、「取れないよ。どうしてこんなことするの。取ってちょうだいよ」と私に頼みます。私は「いいえ、でも他の方法でやり直してみたら」といつてみます。

それから私は紐の端をつかみ、上下にかるく振ってお菓子が動くのをみせます。それでお菓子が手前に近づいてくる可能性を示唆してやります。子供はすぐそれを真似て紐を強く動かし、お菓子を毀してしまい、結局取ることができません。

大人であれば、ここで諦めて止めてしまいます。というのは大人は自分の頭を使い切ってしまう、それ以上の可能性を見つけられないからです。子供も頭を使います。しかし同時に自分の身体の色を使います。子供はどうするでしょう。あたりを見まわし、部屋の中に台があるのを見つけ、重たい台を運び、柵の内側にやっとのことで投げ入れます。しかし、そうしてみてもやはりお菓子を捨てることはできません。するとまた「どうして取ってくれないの」と不平をいいます。

こうしたことで分かることは、私達は子供がするにちがいないことを、大人の考えから予想していたわけですが、子供はその通りにはなりません。子供が実際にしたことは、自分の身体の色で台を柵の内側、つまり問題の場に投げ入れるということでした。しかし依然として問題は解決されぬままになっています。

そこで初めからやり直し、今度は方法をかえて紐を棒のまわりでたぐり寄せてA地点からB地点の方へ移し、お菓子が少しづつ近寄ってくるのを見せてみました。3、4歳の子供は私のしていることを理解できません。ちょっとした間真似をしてみても、つまらないと止めてしまいます。ところが5歳になりますと、この動作が続くとどうなるかを予見できるようになります。こ

れは子供にとって発見であり、すぐその作業にかかります。

ところで私達大人が予見することは、いつも全く抽象的に捉えられているわけで、その中に矛盾を含むことがあります。ある子供は前述の操作の中に次のような矛盾があることを自分の目で見つけます。つまり紐がB地点までくると柵からお菓子までの距離が、A地点の柵からお菓子までの距離よりも長くなっていることを見つけて、つまりお菓子がかえって遠のいているのを見つけて、間違っただけを教えないで下さいと抗議します。その通りで子供のいうことは正しいのです。正しいのですが、しかしそれはB地点で見た限りで正しいことで、この子供にはもう一面の真実、つまりB地点からC地点へ紐が移行するにつれてお菓子が取り易くなるということは予見できないわけです。

大人は状況をみてお菓子を取る方法をすぐ見つけるのですが、子供はそれできません。しかし、子供は子供の仕方では傾聴に値する根拠を見出していきます。子供はそれを頭の中で考えるのではなく、実際に身体を使って、また自分の目でみて、この方法が良いという証拠をつかんで行動をします。

以上の小さな二つの実験から分かりますように、子供の自己形成は決して機械的な生理学的過程によるだけではなく、それは発見の過程という創造的な過程を辿るものであり、この過程の中で突如として子供は問題の解決を見出していくのです。

この実験で子供が身体を使って問題の解決をはかっていることが分かります。しかし最初の例で分かるように子供がいつも指で積木を支えているわけにはいきません。人間が橋桁になって橋を支えるということは現実にはできません。従って子供はある時点で自分の身体の限界に直面します。つまり、身体を使うだけではそれ以上できないことに出会います。そこで次の解決法を子供は考え出そうとしていきます。このように子供は機械的に成長するだけでなく、発見、予見、物的世界への自己投入を通して考え、問題の解決をはかる方向へ常に移行していきます。

私達は自己形成における思考力の発展の過程を、種々の分野で行なわれる論議、実験、あらゆる経験から考察することができますが、特に人間関係においてこの問題を考えてみたいと思います。

人間関係においても、今まで述べたことと同様なことが本質的に当てはまります。即ち子供は極めて限定された可能性の中から始めるのです。そして子供が母の腕や両親のいる家庭などで十分に守られていさえすれば、子供が周囲の世界で起きることを理解できるか否かということは主要な問題ではありません。人間関係における主要な問題は子供の安全ということです。しかし、すぐにその安全だけでは十分でなくなります。私達は、ただ単に人間を安全に保護しておくだけで、その人が立派に成長して彼自身になるように助けることはできません。まもなく子供は自分をとりまく世界の探検にとりかかります。子供が最初に探ろうとする対象は、再び子供の身体のすぐそばに存在するものです。しかしすぐに活動範囲を拡げて、自分の小さい寝台に限定されぬ世界へと進出してゆき、その時点まではある距離を保って見られていたものを発見し始めるようになります。生命の危険がこうして始まります。子供は階段から落ちたり、歩いてつまづいたり、その他あらゆる恐ろしいことが起こり得ることになります。こうして子供の人生は困難を伴います。今まで子供の生活は安全でしたが、実は躊躇しているだけで何もしていませんでした。しかし自分で何かをし始めようとすると、直ちに彼は危険に直面するのです。同時にまた他のことが起こります。というのは、教育する側が、子供が多かれ少なかれ独立するように助け始めるからです。つまりこれが解放の過程です。この解放の過程で二つのことが同時に起きます。両親が例えば食事の時間を決めたから子供はその時間まで待たねばならないと言う時、両親は時の流れの中に秩序(order)を導入します。さらに教育はあらゆる種類の関係の中に秩序を導入します。このことは同時に次のことをも意味します。例えば、両親が子供に「あなたのおじいちゃんが来ますよ」と告げると、子供は「今日来るの」と聞き、それに対して「いいえ、明日ですよ」と答えられるとします。子供はこの答えを聞いて「ああそうか、待たなくちゃ」と考え

ます。子供はここで秩序をもち、子供が自分でそれを自分に言ってきかせていることが分かります。

また、両親が「あなた」の食事をおあがんなさい、「あなた」のスプーンですよ、「あなた」のコップで飲みなさい、「あなた」の着物を着なさいと言う時、子供の「自己」は「自己」として働くよう常に両親から促がされています。従って必然的に、殆どの初歩の教育で、私達は「自己」の形成の準備をしていることとなります。

今、私は「自己同一性」(identity)という言葉を書きました。自己同一性とはその人の歴史です。それは子供が自分自身を形成していく歴史です。勿論あらゆる種類の影響を受けながらです。多分、子供にとって本質的なことがうまくいかない、失敗するということがあるかも知れません。恐ろしいことが目の前で起こるかも知れません。しかし子供の「自己」は前進し、そうした問題に対処していかねばなりません。教育者はそれを助けようと試み、成功するかも知れません。しかし主要なことは、子供がどのようにして本当に自分で自分の経験を考えていけるかということなのです。

「形成」、つまり自己創造の中に、子供が小さい時にもった過去の体験が組み込まれます。例として、私は今、子供の頃に目の前で自分の父親を殺されるのを目撃した経験をもつ少年を考えています。これがこの少年の過去だったのです。長い間私達は、この少年が何故手を全く使おうとせず、手をだらりとたらしただま歩くのか分かりませんでした。それが分かったのは、その少年が子供の時目撃したことが、そのことに影響を及ぼしているに違いないと知った時です。この少年は自分の父親の手が目の前で切り落とされるのを見たのです。

このような少年に会った時、一体どうしたらよいのでしょうか。はじめは私達にその子が理解できません。過去に何があったのか知りません。私達に分かることは、その子が恐ろしい過去をもっているに違いないということだけです。その子に「どうしてそんな忌むべき過去を忘れてしまわないのか」とは言えません。

ここで前に述べたこと、つまり、子供がゆっくりゆっくり彼の身体の限界を突き破っていく仕方のことを考え合わせて下さい。そのような時期に、このように恐ろしいことが起きているのは、一層悲劇的と言わねばなりません。子供は自分の身体をまだ完全に自分で規制できる状態ではなく、身体は依然として周囲の世界の一部です。こうした段階で、自分の安全の最も大切な保障者たる父親に、そんな恐ろしいことが起こったのです。このような少年に一体どうしたらよいのでしょうか。

私はその少年とちょっとした遊びを始めました。それは少年と一緒にボートにのることでした。私が先に腰かけ、少年にさあいらっしゃいと手をさしのべても、彼は自分の手を動かそうとせず、手をただ力なくなったらそのまま坐るだけでした。初め私がボートを漕ぎ、次に彼の手を私の手の上に置かせて漕ぎました。しばらくしてから私は彼の手を櫓の上に直接のせ、その上から私の手を当てて向う岸につくまで一緒に漕ぎました。岸について私はボートから降り、少年に手をさしのべておりに言いました。その時この少年が自分から自分の手を動かして私に応じたのは、四ヶ月半こうしてボート漕ぎを一緒にしたあとでだったのです。私はこの時解決の糸口を見つけたと思いました。

さてこの時点で何が起こったのでしょうか。この少年はこの時もはや過去に属してはおらず、現在の中にいるのです。私は少年と、これから彼が学校でするであろうことを話し合い始めました。それはつまり未来です。これで、実際に人間的な状態にある自己とは、過去と未来を含んで現在にあるということが分かります。

このお話をきいて、皆様はこの少年がその後どんな職業を選んだと思いますか。彼はめがね商になったのです。レンズを正確に切ったり、めがねを作る仕事ですが、彼は自分の手で精密で立派な仕事をするようになったのです。

これは再び創造的解決というべきものです。誰かが彼にめがね商になったらと忠告するなどとは考えもつかぬことです。一体どこに彼がめがね商にならねばならぬ理由があったのでしょうか。彼は目が悪くて困っていたわ

けではありません。

彼はどんな答えをしたと思いますか。私が彼に会ったのはアメリカで、彼は25歳の青年です。すでにめがね商になっていました。彼はこう話してくれました。「私はめがね商になりました。それは私の父への愛のためです。といいますのは、私のこの手が他の人達の肉体的な欠陥を補うことができるからです。私は外科医になっても歯医者になってもよかったです」と。素晴らしい答えではありませんか。

私達はこの少年が自己を創造し、自己を保護や安全から解放しつつ、自分の身体的世界の限界から脱出しようとするのを見てきたわけですが、このお話から出る結論は、この少年が過去、現在、未来の継続、つまり一つの創造的過程の中に生きているのだということです。

今自分の過去を語るこの25歳の青年の話を読みかきとくと——とは言ってもまだそのことを話す声は恐れに震えていましたが、ともあれ今それを話せるようになっていました——彼は自分の忌むべき過去と彼が選んだ職業との間に関係を見出しているのです。それは現在唯今起こっています。恐ろしい問題の創造的解決が生命の継続の中で行なわれています。

さらに彼の現在の状況や、今彼がもっている人生に関する考えに話を進めた時、彼は自己形成にとって本質的なことをいくつか話してくれました。「それは大変むづかしいことでしたが、私は何とかして過去から脱却しなければなりません。それが出来たのは許すということだけでした。私はしかし一体誰を許したらよいのか分かりませんでした。がとにかく私は許さなければならなかったのです。」

それから彼は私には古典的莊重さを持つと思える言葉をいきました。「時の流れは変えることはできません。しかし私達は許すことができます。」彼はつけ加えます。「人間の犯す失敗、愚行、あるいは残忍さすらも、もし許されることがないとすれば、人間に未来はありません。死のみです。それでは人間は一生過去という牢獄に閉じ込められたままになります。」

以上のことから、自己形成において私達は過去に対してある立場を取るこ

とが必要であることが明らかになります。私達は自分の立場をはっきりさせねばなりません。私達は正直で謙虚な判断を下さねばなりません。或ることに否と言ひ、他のことにイエスと言わなければなりません。或る場合には許し、或る場合には私達が自分に責任を負わねばなりません。こうして過去との関係を繕うことは、その人の自己創造の行為にほかなりません。

同じ会話の中でですが、しばらくして彼は、今まで結婚を決意することはむづかしいことだったと話しました。彼は自分の過去の経験に対して彼自身の立場を本当に見出さないうちは、そのような過去との関係を、彼が愛しようとする人の中に持ち込むべきではないと思う、というのです。

皆様お分かりのように、この青年は過去の問題を本質的に解決していません。しかしまだ未来の問題を解決してはいないのです。そこで私は彼が時の流れについて言ったことを思い出させました。「時の流れは変えることはできないが、私達は許すことができる」と彼は言ったのです。私は言いました。「時の流れは予告できないけれども、しかし私達は約束できるのです。」

そこで私達は約束について話し合いました。約束とは自分の上に責任を引き受けることです。約束されなくてもそうしなければならないことがたくさんありますが、相手に何かを提供するといったら私達はそれを守る責任があります。ところで何を相手に提供するのでしょうか。ひょっとしたらイースター・エッグの中に爆発寸前の手榴弾をかくし、何も約束せずただ贈物として渡すというようなことがあるかも知れません。従って責任は約束にだけ関係があるというのではなく、他のことにも関係してくることが明らかになります。つまりそれは信頼です。人間関係は信頼の予見に、信頼するに足る関係に基礎をおいています。

私がこうしたことを話しますと、彼は「あなたのおっしゃることは正しいと思います。しかしそれはまだ私にとって真実になっていません」と言いました。「それは私にとって依然として一つの理論にしかすぎません。一つの哲学にしかすぎません。私がそれで生きていける現実ではありません。それはまだそれを実際に実行して実現できるものになっていません。ですから

もう少し私に時間を下さい」と言うのです。

ほぼ一年後に、彼は私に手紙をくれ、今やっと本当に約束ができるようになりました、と書いてくれました。彼が何を言いたがっているか分かりました。彼は、彼の生活を生涯に亘って結びつけることのできる若い女性を見出したのです。この青年の性格から推して、彼が未来を選ぶ時はそれを完全に選びとるのだということが分かります。

しばらくしてから、この青年がオランダに短い滞在でしたが来たことがあり、私を訪問して質問をします。「愛とは何だとお考えになりますか。」彼はスピノーザを読んだのです。「愛は愛する人の幸福を願う」というスピノーザの言葉をひいて、彼は言いました。「私にはこれで十分だとは思えません。一人の人の幸福を願うことでは十分ではありません。私は多くの人々の幸福を願っています。それは特定の人への愛ではなく、人類への愛です。」私は頷きました。

そこで私は以前アメリカで彼に言ったことを思い出させました。時の流れは予告できないが約束はできるということです。一体約束とは何を意味するでしょう。彼は、私が先ず考えていることが責任ということであることを理解していました。それが全部ではありません。彼は、約束の中で私達がただ漫然と人の幸福を願うのではなく、約束とは人の生命と幸福を私達の上に引き受ける、自分の肩に受けとめることなのだとして理解し始めていたのです。

人間は自己の同一性を持っているというだけでは十分ではありません。私達の自己形成の中で私達はアイデンティティを形成発展させなければなりません。私達は誰かにならなければなりません。これは当然のことですが、しかしこれだけでは十分ではありません。人は同時に、自分自身を彼が肩に引き受けたことと自己同一化する用意ができていなければなりません。彼の自己同一性が始まりで、彼の自己同一化が次のステップになります。自己同一性は自己同一化の始めなのです。そしてその同一化の中で彼の自己同一性は失われることなく、かえってその完全な課題を見出すのです。

従って私達はほんやりと人の幸福を願うものではありません。私達が約束す

るその瞬間から、自己同一化という第二の相が始まるのです。そしてこの時から私達の生活は完全に責任のある大人の生活に入ったといえるのです。最も困難なことを自分の上に引き受けるからです。自己同一性のための問題解決と、人に対し約束した果すべき課題に自己同一化させることを、身に引き受けるからです。こうして自己同一化と自己同一性の中に大人としての生活の過程が見出されます。

従って自己同一性の見地からみますと、他への課題に対する深い尊敬の念と自分自身への尊敬が同時に存在しなければなりません。ある課題に取り組む中であなたは自己を見失わず、自分が課題と自己同一化していると言う場合があります。あなたが本当にその課題に自己同一化しているのだとすれば、その時は実はあなたがその課題を変えている時なのです。それではどこか間違っています。それではあなたはもう批判的な距離を保ってはいないこととなります。また自己同一化で本当に創造的ではあり得なくなります。それはある種の偶像崇拜になってしまいます。

この自己同一性と自己同一化の二つを一緒にして人間の尊厳と呼ぶことを、私は困難に直面している子供や若い人達から学びとりました。若い人の自己形成の過程で、私達が彼等の困難を切り抜けようとする時、私達はいつも一つ一つ違った問題に出会います。一つとして同じ問題はありません。しかしながら、少年少女が自分自身を、つまり自分の過去、現在、未来を、今自分の上に引き受けている、しかもそれを自分の都合のためにだけでなく、課題ないしは人に対する——普通はこの両者一緒に対してですが——自己同一化に本当に献身するためにそれを引き受けている、と言っている状態に先ず彼等がなければ、私達は決して問題を解決することはできません。

さて、今まで紹介してきた青年の話を終らせる時が来ました。この青年が結婚した相手の女性はどんな人だったのでしょうか。彼女は一体誰だったのでしょうか。勿論彼女には名前がありますが、ここではそれは大して重要なことではありません。

私が後になって彼女に会った時、彼は以前に話さなかったことをこまかく

明かしてくれました。彼はこう言ったのです。

「彼女はとても美しい手をしているんです。」彼女は世界的に著名なハーピストです。今は彼女の名前は明かさずにおきましょう。

ご清聴ありがとうございました。

(昭和48年9月25日広池学園講堂における講演)

通訳 麗沢大学助教授 谷口 茂)